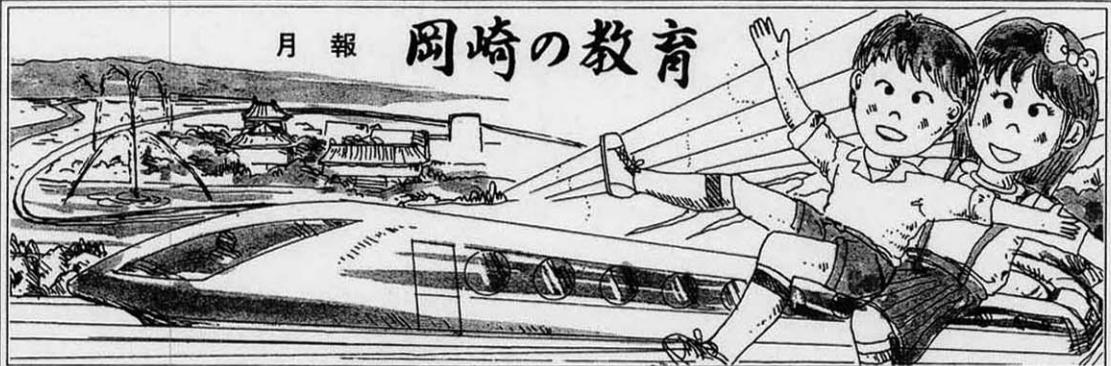


月報 岡崎の教育



7月号

平成元年7月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会

君たちの手は 素晴らしい
空き缶を集め
紙くずを拾い
泥を集めて
すくい出す

君たちの足は たくましい
大地を踏みしめ
雑草を抜き
汚れた流れに
踏み込んでいく

君たちの瞳は 美しい
日常の醜さを
ぎつしりと受け止め
それでも明日を
まっすぐに見つめている

君たちの後ろ姿は すてきだ
何ものにも負けない強さがある
——十年後、

今と変わらぬ君たちの
真摯な姿を見たいのだ
（ねがい）



(川よ、よみがえれ—ねずみグループの活動—城北中)

一想隨教育

ふるさと再生に思う



原田市郎

昨年の八月六・七日と一日間、滋賀県土山町で、「東海道五十三次シンボジウム」というイベントがあり、教育委員会の方と参加したことがあった。

参会者は約一〇〇名くらいで、かつて宿場のあつたところの人たちが多く、この付近からは、一川・吉田・知立・鳴海などの関係者が出席されていた。

この会のねらいは、「宿場のあつたところの人たちが往時の文化を語り会い、これを後世の子どもたちに伝えるために手をつけないで、ふるさとの再生をはかりたい」ということであった。土山町ならばに同町の商工會議所、青年団の有志の人たちが主体となり、成城大学助教授吉原健一郎氏らを講師としていろいろな催しがあった。

土山は、東海道四十九番目の宿場で、現在でも昔の面影を残した家が多く、た

いへん参考になつた。殊に若い人たちが中心となり町の協力を得ていろいろな活動をしていることに感服した。

最近、村おこしとか、ふるさと再生と叫ばれているが、二十数名の土山の青年たちが実行委員会をつくり、「将来をになう子どもたちのために、われわれは何ができるのか」を指標として活動している熱意に心を打たれた。ふるさと再生は、こうした人たちによつて実現されいくことであろう。殊にかつての宿場の人たちとその文化を語り、お互いの共感を求めるながら進みたいという若い人たちの念願に心の温まる思いがした。

ちょうどその頃、私の住んでいる藤川町では、町並が新しい家造りに変わり、昔の面影が薄れてくるので、藤川宿の再生を市当局にお願いしている時であつたから、私としてはこのシンボジウムにか

考えていきたいと思つてゐる。

この秋には資料館もでき、模型もここに展示されることになつてゐるので、子どもたちが、宿駅の文化を学ぶことよつて、他の地域や外国の文化についても関心と理解をもつことのできるよう育動をすることに感服した。

か言われているが、二十数名の土山の青年たちが実行委員会をつくり、「将来をになう子どもたちのために、われわれは団地ができ、市ではじめての住居表示も実施されて現代化してきた。住宅の若い奥さんが子どもを連れて、藤川宿のこと教えてくれといつてきることがあったが、これらの子どもたちのために、第二のふるさとになつてほしいと思う。

今後、土山のように他の宿場とも関連をはかりながら、ふるさとの再生が文化の面からも盛り上がりが幸いである。

この小稿を終えるにあたり、小中学校の郷土読本が改訂されるに新聞で知ったが、全国的に見ても伝統のある郷土読本であるので、内容をいつそう改善されて岡崎市の子どもたちの、心の再生に役立つてくれることを望んでゐる。

教室中にあがる歓声。二度、三度。小学校一年生の子どもたちの授業だ。歓声の理由は教室の全面いっぱいに貼られた鍵盤の図。

鍵盤ハーモニカの初步指導では、鍵盤の図を黒板に貼つて指導することはよくある。しかし、この授業では参考の先生方もびっくりして子どもたちと一緒に感動してしまつた。大きいのである。鍵盤は一メートルあまり。横はちょうど一オクターブ。しかし、それだけではなかつた。先生はその一オクターブの鍵盤のドとソの位置を教わせ、指名された子にシールを貼らせると、「ドとソはこれだけではありませんね」と言いながら、鍵盤を伸ばし始めたのである。鍵盤の図にしては縦横の比がアンバランスだなど思つていていたが、何と、一オクターブの鍵盤の後ろに一オクターブある。鍵盤の図にしては縦横の比がアンバランスだなど思つていていたが、何と、一

音楽科指導員

うわあ！

永田邦雄

羅針盤

(2)



写 真 家

鈴木 泉 風 氏

ふるさとシリーズ

この人に聞く



二科会会友・全日本写真連盟中部本部員・集団岡崎の指導者として活躍しておられる鈴木泉風氏は、笠田町の写真店で開いた。鈴木氏は愛知学芸大学を御卒業、昭和三十五年まで豊橋市で教職についておられたこと、まず写真家に転身された理由から語っていた。戦時中、小学生時代に豊橋市で強制立ち退きのために家が壊されていく様子を撮り、自分で現像焼付けをしたのが、写真に取りつかれた最初です。出来上がりたものはピンボケでしたが、記憶の手段として写真が使えることを強く感

るものを感じます。今年のように暖冬ならば、つくりの伸び方も違いますので、これを撮るのであります。つくりはいかなんです。

しかし、写真家になろうとしたのは、名古屋港に入港したアメリカ軍艦の艦上にいる黒人兵を撮った「ブラック・セーラー」が二科会で入賞したことがきっかけです。白黒のトーンで白人兵は下船できても、下船できない黒人兵を撮ったのです。

集団岡崎は岡崎市文化協会に加盟する写真の文化団体である。そのリーダーとして鈴木氏は、ここ十数年会員を率いて上高地を撮り続けておられる。

「私は会員に上高地に十年ついて来い」と言っています。そこではワイドな場面よりも、撮るものを見せて撮るよう指導しています。一本の木でも、新芽が萌え出る時、寒さで凍てついている時とで表情が違うのです。通つていううちに四季の装いの変化に気づきそれを撮ってくれればいいのです。

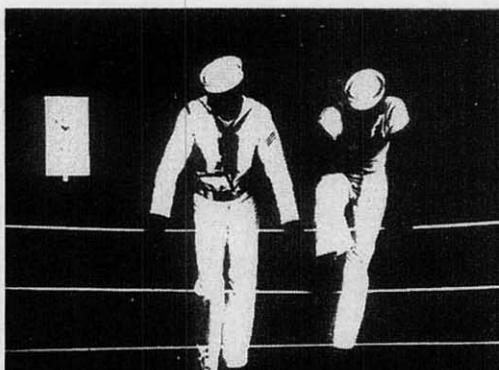
じました。学生時代、アルバイト先の隣人に白系露人の美人がいたので写真を撮らしてと頼んだところ、「素人写真はいや、修正をしなくては」と断わられたのも、不純ですが写真をやろうという動機にもなっています。そして、フランス人のブレッソンの言う決定的瞬間に惹かれたと言つていいでしょう。しかし、写真家になろうとしたのは、名古屋港に入港したアメリカ軍艦の艦上にいる黒人兵を撮った「ブラック・セーラー」が二科会で入賞したことがきっかけです。白黒のトーンで白人兵は下船できても、下船できない黒人兵を撮ったのです。

集団岡崎は岡崎市文化協会に加盟する写真の文化団体である。そのリーダーとして鈴木氏は、ここ十数年会員を率いて上高地を撮り続けておられる。

「私は会員に上高地に十年ついて来い」と言っています。そこではワイドな場面よりも、撮るものを見せて撮るよう指導しています。一本の木でも、新芽が萌え出る時、寒さで凍てついている時とで表情が違うのです。通つていううちに四季の装いの変化に気づきそれを撮ってくれればいいのです。



(住) 生年月日 昭和五年五月二十七日
所 岡崎市笠田町二二



能率的な一時間

保健体育科指導員

鴨下智幸

広げられた鍵盤のドとソにシールを貼る子ども、それを見ている子どもたちの生き生きとした目が、「ドもソもいつぱいあるんだ。おもしろいね」と言つてゐるようであつた。

るものを感じます。今年のように暖冬ならば、つくりの伸び方も違いますので、これを撮るのであります。つくりはいかなんです。

しかし、写真家になろうとしたのは、名古屋港に入港したアメリカ軍艦の艦上にいる黒人兵を撮った「ブラック・セーラー」が二科会で入賞したことがきっかけです。白黒のトーンで白人兵は下船できても、下船できない黒人兵を撮ったのです。

集団岡崎は岡崎市文化協会に加盟する写真の文化団体である。そのリーダーとして鈴木氏は、ここ十数年会員を率いて上高地を撮り続けておられる。

「私は会員に上高地に十年ついて来い」と言っています。そこではワイドな場面よりも、撮るものを見せて撮るよう指導しています。一本の木でも、新芽が萌え出る時、寒さで凍てついている時とで表情が違うのです。通つていううちに四季の装いの変化に気づきそれを撮ってくれればいいのです。

新聞社の要望に応じて、季節感のある岡教組写真展の審査をされたこともお聞きして、訪れた者は驚きました。

ダансの学習は、作品をつくること、まとめることに重点をおきすぎ、一つの作品創作に何時間も費すことが多い、活動自体は、話し合いが多く実際に身体を動かす場面が少なくなりがちである。

リズミカルな音楽に合わせた心身のほぐしで始まり、個人やグループによる動きの素描、早つくり、見せ合いと続く一時間の授業の流れが何回もつみ重ねられ短かい時間で特徴をとらえる力が育つている。すばやい思考の働きと身体の活発な反応を一時間で完結する学習が、能率的であり、効果的な手段となつてゐる。

海外派遣教員 座談会

海外での教育体験



授業について

都築	泉	(六南小長、ナイジエリア)
鈴木	忍	(福岡小、オーストラリア)
江村	力	(常磐小、オーストラリア)
伊藤	廣悦	(山中小、スペイン・

編集委員 五名

インドネシア

都築 ラゴス日本人学校は、小学生から中学生まで三十人ほどの小さな学校です。学級によつては複式もあります。問題は子どもの在籍年数が少ないことです。しかし、日本と同じような教育をするという理念があります。ほとんどマンツーマンの教育です。

江村 メルボルン日本人学校は、できたばかりの学校で、ものが何もなかつた。塩酸を買うのに半日探し回りました。輪ゴムを買うのに町中を探しました。すべて、手作りの教材でした。三年目になるところが豊富になつてきて、教師自身がわがままになつてきました。

江村 メルボルン日本人学校は、できたばかりの学校で、ものが何もなかった。塩酸を買うのに半日探し回りました。輪ゴムを買うのに町中を探しました。すべて、手作りの教材でした。三年目になるとものが豊富になつてきて、教師自身がわがままになつてきました。

オーストラリアは、一週間ぐらいを単位にしまして、子どもなりの取り組みをさせています。旅行の宿題など、一人ひとりが追究できるやり方をしていました。

鈴木 指導書もなく、テストも自作で

行つてきました。個性の尊重という観点で指導しています。セットもないでの、子どもも自身が工夫するんですよ。ものを大切にしますね。

伊東 教材はほとんどないですね。教師のアイディアとインスピレーションで行っています。教材探しにはリストがあります。教師間で代々言い伝えられています。アサガオは、六百キロ南のアンダルシアまで探しに行くとかね。

日本人学校へ来ない子どもがいるんですね。土曜日だけ日本人学校へ来る補習校があります。



ラゴス日本人学校の卒業式



マドリッド日本人学校での補習校

鈴木 宗教的な背景があるかもしれないが、向こうの子どもはぬけがけをしな

しつけについて

江村 個を生かした授業というのを強く感じましたね。私たちも、もっと工夫をすれば、今の六時間の授業の中で、何か個性を生かすものがでるのではないかと思うのです。制度の問題としてではなくやっている人もあるはずです。

江村 個を生かした授業というのを強く感じましたね。私たちも、もっと工夫をすれば、今の六時間の授業の中で、何か個性を生かすものがでるのではないかと思うのです。制度の問題としてではなくやっている人もあるはずです。

日本人学校ではなく、現地校へ通つている子どもの声を聞いてみると、現地校は「自主性と自由がある」「自分のすることを認めてもらえる」などの評価をしている反面、「先生が細かく見てくれない」「自分たちのトラブルに一切関与しない」などの意見もあります。

日本人学校ではなく、現地校へ通つている子どもの声を聞いてみると、現地校は「自主性と自由がある」「自分のすることを認めてもらえる」などの評価をしている反面、「先生が細かく見てくれない」「自分たちのトラブルに一切関与しない」などの意見もあります。

スペインへ来て、三年を過ぎた子どもは、一斉にやる授業について抵抗を感じています。

日本人学校ではなく、現地校へ通つている子どもの声を聞いてみると、現地校は「自主性と自由がある」「自分のすることを認めてもらえる」などの評価をしている反面、「先生が細かく見てくれない」「自分たちのトラブルに一切関与しない」などの意見もあります。

三時半には子どもは学校からいなくなります。先生も四時半には帰つてしまします。先生も学校にいる必要がないのであります。帰つてから子どもたちは、社会教育としてのクラブに入ります。そこで自分が好きなことをそれぞれがやつているのです。

伊東 今、日本では国際教育とか国際性についていろいろ言われますが、スペインでは、聞いたことがありません。言葉そのものがないという感じです。相手を認める事、人と自分とは違つて当然と考えているからでしょうか。

都築 生活そのものは、とても貧富の差が大きいし、知能の差も大きいです。金持ちの子弟は外国へ送つて教育させていふと思えば、貧しい家庭では着る物も満足にならぬ状態です。

ラゴスでは、生きることに精一杯でした。電気が来ない。水がそのままでは飲めない。こんなことはざらでした。食べ物も、ほとんど日本から持ち込んでものを食べて暮らしていました。

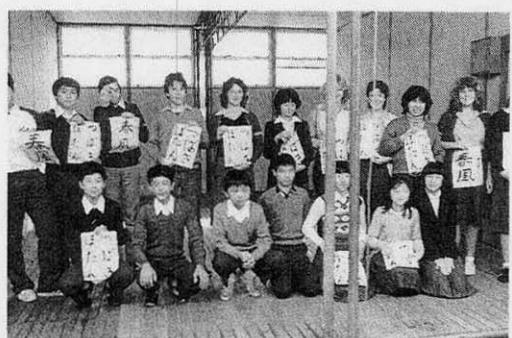
治安が大変悪いので、門番がみはつていたり、ベッドへ行くまでに二十ぐらい鍵をかけなければなりませんでした。

人は人、自分は自分という考えが行き渡っていますね。ごみ集めのおじさんが自分にプライドを持っていました。

伊東 インドネシアでのことですが、子どもが勤労をしないですね。一度清掃指導をしたことがありました。すぐに挫折しましたがね。まず親から文句が出来た。掃除をやらせるために学校へやつているのではないとね。次に清掃スタッフから苦情が出ました。われわれの仕事を



メルボルン日本人学校での野外乗馬訓練



パース日本人学校の習字学習

こんな環境ですから、子どもは変わつてしまます。環境が変われば人も変わつるのです。

江村 オーストラリアでは、親に対するしつけは厳しいです。

自由を求めている反面、子どもに対しては、厳しいしつけを望んでいます。私立の学校へいれたがつていて、私立はしつけが厳しいので、子どもが生まれると同時に予約するそうです。公立は、校風が自由で、シンナーなどもあり、あまり入れたがりません。

都築 海外派遣の問題は、何のために来たかを確認しなければならないということだと思います。本当に海外子女の教育をしようと思ったら、同志が欲しいと思います。キヤリアのある教員が欲しいですね。

算数つて楽しいね

羽根小 薩田 吉則

「わたし、算数きらい。」

「計算はいいんだけど、文章題はきらい。」

高学年になると、こういう子が増えてくる。こういう子たちに少しでも、算数のおもしろさを知つてもらいたいし、わかる喜びを味わつてほしいと思い、この三か月、算数の授業を取り組んできた。

どんなことに心がけてきたかというと、できるだけ興味を引くような問題づくりをすること。それから、理解の遅い子のため具体物を用意すること。自分の考え、自分の持っている能力

といふで、できるだけ興味を引くような問題づくりをすること。

それから、理解の遅い子のため具体物を用意すること。自分の考え、自分の持っている能力

を少しずつ、自分で考えて解いていく。こういう学級の雰囲気は出てきた。

そのきっかけは、今まで、公式や予習でやつてきた方法にとらわれていたT男が、一生懸命図を書いて解いたのをみんなの前で発表した時からである。そ

で問題を解くこと、以上のような点を心がけてきた。もちろん程度の低い考え方でも、認めていく学級づくりも同時にしているのであるが。

しかし、自分の考え方で解くといつても、予習や塾で知つた方が法にとらわれて、思うようにならないのである。例えば、分数の問題では、分数×分数の意味を考えようとせず、公式によつて分母と分母、分子と分子をかけるんだ、と結論を出してしまふのである。どうしてこうなるのか、子どもたちに聞くと答えられないものである。

これでは、自分で考えたのではなく、人に教えたのにならぬ喜びは味わえないものである。もちろん、分数のかけ算やわり算の考え方ばかりかしらないので、能力の低いものには少し無理かもしれない。しかし、少しずつ、自分の考え方で解いていく。こういう学級の雰囲気は出でてきた。

そのきっかけは、今まで、公式や予習でやつてきた方法にとらわれていたT男が、一生懸命図を書いて解いたのをみんなの前で発表した時からである。そ

れでいたけど、自分なりに考えたりつぱだね、とほめたからであろう。その子に影響されてか少しずつ自分の力で解こうとしたのである。

しかし、自分が考えで解くといつても、予習や塾で知つた方が法にとらわれて、思うようにならないのである。例えば、分数の問題では、分数×分数の意味を考えようとせず、公式によつて、T男がボソッと言つた。そして、T男がボソソと言つた。そして、「算数つて、案外楽しいね。」うれしく感じた。

「早くここまでやつて」と、駆け寄つてしまふこともしない。そんな彼女だが、母の日のことで絵をかいだときは、意外に早くでき上がりつて持つてきた。絵を見ながら、話を聞いていくと、ぱつり、ぱつりと言葉が返ってきた。話した言葉をそのまま文字にして、絵のところに書いていった。それを『ははのひ』という題の詩にしてみた。

数日後、児童集会で、N子さんが、その詩を発表するという機会に恵まれた。



教育日々



ははのひ

緑丘小 市川里恵子

ははのひ

N子

きのう

おとうさんはかんこくに
しゅつちょうにいつたから
いなかつた。

おかあさんに
ペンダントをあげたら
おとうとがなきながら、

「つづつて。」
ついていた。

おとうとにも
つくつてあげた。

強い。

その子のベースに合わせて、ゆつたりと聞いてやれる心のゆとりが必要だと思った。

「早くここまでやつて。」

と、駆け寄つてしまふこともなしであった。

そんな彼女だが、母の日のこ

とで絵をかいだときは、意外に早くでき上がりつて持つてきた。

と、ばつり、ばつりと言葉が返ってきた。話した言葉をそのまま文字にして、絵のところに書いていった。それを『ははのひ』という題の詩にしてみた。

数日後、児童集会で、N子さん

が、その詩を発表するという機会に恵まれた。

この遅いN子さんが、家ではお姉さんらしく、幼い弟の面倒を見てあげたりするのかと、クラスの子どもたちも私自身も見直してしまった。

体育館で発表したこと、本人も自信を持ったのか、授業中見えてあげたりするのかと、クラスの子どもたちも私自身も見直してしまった。

学校では、あんなにもやるこ

と遅いN子さんが、家ではお

姉さんらしく、幼い弟の面倒を

見てあげたりするのかと、クラスの子どもたちも私自身も見直してしまった。

一年生の子は、ゆっくりと場

面を思い出し、眼られた語彙の中から、一生懸命に言葉を探し

ながら話し始める。ことにN子

のような子の場合、その傾向が

ついていた。

おとうとは、

「ありがとう。」
ついていた。チヤイムの音にせ

かされて、



◆その瞬間君は輝く
◆贈刊行物・資料等

学校体育賞設立十五周年記念誌

愛知県中小学校体

育連盟岡崎支所

B2六切 九五ページ

◆体育のはなし

大久保慎一

変型B5 一〇〇ページ

◆春日遅々

A5 四六八ページ

◆多年勤続表彰の先生方

B6 五六ページ

明日の岡崎を考える 第十六回

岡崎市民大学

◆会場 岡崎市民会館ホール

◆期日・講師

① 七月二十三日（日）

「日本の医療の将来」

東京大学医学部教授

森岡

恭彦氏

② 八月五日（土）

「こころの風景」

作家 五木 寛之氏

神津カンナ氏

③ 八月十九日（土）

「青春を語る」

作家 竹内 郁夫氏

神津カンナ氏

④ 八月二十六日（土）

「生き物の形づくり」

基礎生物学研究所長

名古屋大学教育学部教授

⑤ 九月一日（土）

「マチづくりの目つけどころ」

堀内 守氏

守氏

を深めた。

◆学校図書館における
子どもにすすめるこの一冊

現職教育委員会

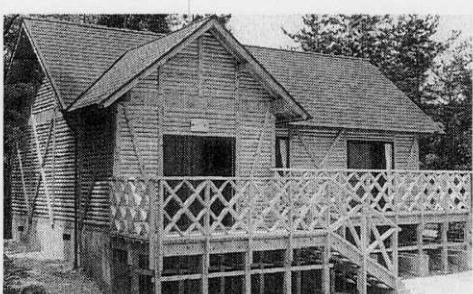
学校図書館部

少年自然の家

昨年度、檜の間伐材を利用して、十人用の丸太小屋五棟が設置された。木の香りが漂う小屋での宿泊は、従来のテント泊では味わえない体験であり、児童生徒に大変好評であった。

本年度、さらに十人用二棟と三十人用のベンション風丸太小屋一棟が完成した。各小屋にはハイジ・セーラ・バイキング等少年達の夢を育むような名前が付けられている。

丸太小屋の完成により、百人の宿泊が可能となり、野外活動の拠点として、幅広い活用の仕方が期待される。



■宿泊用丸太小屋建設

第三十三回
岡崎市中学校
総合体育大会の記録

(前号未発表分)

◆野球

優勝 勝竜南

二位 六ヶ美

三位 福岡・甲山

◆水泳

優勝 男 矢作北 女 矢作北

二位 男 甲山 女 葵

三位 男 常磐 女 甲山

◆印は大会新記録

種目	男子			女子		
	氏名	校名	記録	氏名	校名	記録
100m自由形	北埜 智信	常磐	57"8	今泉妃佐乃	常磐	1'05"9
200m自由形	菅田 三昭	矢作北	2'11"7	近藤 知加	矢作北	2'30"3
100m平泳	矢嶋 利成	南	1'17"2	高橋 陽子	葵	1'19"1
100m背泳	河野 浩之	甲山	1'09"6	山下 弥生	矢作北	1'17"4
100mバタフライ	田口 治	矢作	1'09"2	本田 綾子	竜海	1'09"8
200m個人メドレー	深田 光	城北	2'34"1	小里日奈子	葵	2'34"1
400mメドレーリレー	甲	山	4'45"6			5'07"9
400mリレー	矢作	北	4'12"5	甲	山	4'33"9

・表
紙
写
真
・カ
ツ
ト
詩
ト
城
北
中
小
川
惠
子

城
北
中
藤
川
小

太
鈴
木
一
生
小
川
恵
子

七月に入ると、夏休みを迎える気持ちがつる。子どもたちが楽しみに待っている夏休みの生活は、日誌を通して推し量ることができる。

ここに取り上げたのは、昭和四年の夏期休暇日誌である。当

時はまだ三河で発行されてな

く、愛知師範同窓会編の日誌を

使っている。夏休みの生活を規

則正しく、意義あるものにする

ためという目的は同じであつて

も、内容には違いが見られる。

一年生は全て片假名による記

述、三年生からの修身や五年生

の記述がある。

この日誌は、西三河全小中学校の子どもたちに活用されている。

三河でも夏休み日誌が発行さ

れるようになつたのは、昭和二

十六年からである。現在、愛知

教育文化振興会で発行される日

誌は、西三河全小中学校の子どもたちに活用されている。

時代が推移し、教育方針に変

化があつても、子どもたちの夏

休みの生活は、日誌の中に記さ

れていている。

職員会が終りに近づく。実行会への責任感、それに伴う負担感、なんとも言えない個々の気持ちの高まりを打ち消すかのような終了時の全員の拍手。輪番による司会者へのねぎらいが、一瞬温かい雰囲気をつくる。ささいな挙動が心の和をつくり、さわやかな出発になる。

洋風の料理にタパスで、きりりと味覚が引きしまる。

暑さに加えて湿度も高い日本の夏に、 spaイスのきいた料理で食欲増進を図る季節が到来した。冷奴におろししようがやからしい。

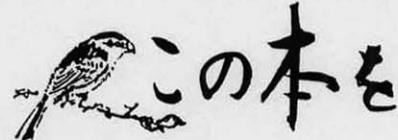
教室もとくだれがち。spaイスのきい授業で学ぶ心を引きしめたいものだ。

泉



美合町 浦野広光氏蔵

昭和4年の 夏期休暇日誌



*自己修養のすすめ	赤根祥道
三笠書房	¥ 440
*逆さま流人間学	遠藤周作
青春出版社	¥ 730
*虫プロ興亡記	山本瑛一
新潮社	¥ 1500
*教ながら教えられながら	大村はま
共文社	¥ 1200

※児童詩教育のすすめ — 江口季好著

百合出版株式会社 ¥ 2500

教育は、子供と教師の感動の共有によって実現すると、主張してきた著者の児童詩教育40年の集大成の書である。

著者の詩との出会い・詩的体験の自伝を基に詩とは何かを説き、次いで児童詩教育の方法を著者の実践から詳述されている。この部分が具体的で平易、誰にでもわかりやすい。最後に児童詩教育の将来的展望を説いて、実践への夢を提示している。心の教育が課題となっている今すべての教師に薦めたい本である。



アシサイが濡れている。明日もぐずつぐのかと空模様が気になる毎日である。天気予報技術の発達は目覚ましいが、次のように話された。子どもは、自由を求めて、公立学校を望むが、親は、厳しいしつけをのそんで私立学校へ入れたがるのだという。どこの国でも、親と子の考えのずれはあるものだと感じさせられた。

夏休みの計画を立てる時である。

いい夏にしたい。

スパイスのきいた料理で食欲増進を図る季節が到来した。冷奴におろししようがやからしい。

洋風の料理にタパスで、きりりと味覚が引きしまる。

暑さに加えて湿度も高い日本の夏に、 spaイスのきい授業で学ぶ心を引きしめたいものだ。